

野口寧齋の漢詩集『出門小草』の上梓をめぐる

日 野 俊 彦

はじめに

『出門小草』出版に至るまで

野口寧齋（慶應三年三月十五日（1867・4・19）～明治三十八（1905）年五月十二日）は、森春濤ら幕末から明治十年代の漢詩壇を牽引した世代の後を継ぐ存在として、森槐南らとともに注目すべき人物である。しかし、彼のまとまった漢詩集がないことと、彼の伝記資料に乏しいこと——これは彼の死が、日本の猟奇殺人事件の一つである「野口男三郎事件」に関係することに因るか——、この二点がおそらくは近年になるまで研究の対象とならなかった理由であろう。ただ、今日では寧齋を対象とする論文が書かれており、徐々に研究が進みつつある。その一助として、本論文では、寧齋の唯一の漢詩集である『出門小草』（明治二十三年刊）を研究対象とする。まず、当時の寧齋の環境について触れ、次いで『出門小草』序跋執筆者等との関係、収録された漢詩の構成について述べる。最後に所収の漢詩「恭輓春濤森先生」詩から、寧齋の描いた森春濤像について考えたい。

中村忠行編「略歴」では、寧齋について次のような一節がある。³⁾

十四年父の病没により帰郷、数年後再び上京して哲学館に入り、かたわら詩を森春濤・槐南に学んだ。同門の佐藤六石とは、その頃から親交を結んだ。かくて、寧齋の詩は、「新新文詩」第十三集（明十九・六）以下、「毎日新聞」の「滄海拾珠」欄、「東京日日新聞」の「文苑」欄などに見られるが、実際に詩人としての声価が定まったのは『出門小草』の上梓（明二三・三）以後のことで、同年九月の星社結成の折には、既に「詩壇の鬼才」の名をほしいままにしていた。

概ね従うべきものであるが、既に合山林太郎の指摘にあるように、寧齋の詩が「新文詩」に初めて掲載されたのは、同第九十三集（癸未四月）所収の「若林残夢翁七十九寿詞」原三三一首である。癸未は明治十六年、寧齋十九才のときである。⁴⁾

森春濤・槐南父子の編になる「新文詩」には、寧齋の父、野口松陽（名は常共、字は伯辰）が第一集から、時に自らの詩を載せ、時

に他者の詩の評者となるなど、深い関わりがあった。同じく第九十三集に、土方久元の「野口松陽三回忌辰作」詩も収められていることから見ると、春濤らは寧齋の詩壇への初登場の時期を、松陽の喪が明けたころとした、と考えることができる。また、土方の詩には巖谷一六・森春濤の評があり、一六は「一字一涙、不堪多読（一字一涙し、多読に堪えず）」、春濤は「一読一慟、予欲刻之松陽墓道碑焉（一読一慟し、予、之を松陽の墓道碑に刻まんと欲す）」と評している。

春濤と松陽との交際については、合山論文に詳しいため、ここでは、春濤と同じく明治漢詩壇を牽引し、詩文集『一六遺稿』を残した巖谷一六と野口松陽との交際について触れたい。両者の交際の始まりは、共に太政官に勤め始めた明治七、八年ごろであろう。後に松陽の漢詩集『毛山探勝録』(松陽が亡くなってわずか三ヶ月後の明治十四年八月刊。出版人は森槐南)では、一六の自作自書になる「読毛山探勝録」がその掉尾を飾っている。その中に「余与伯辰、同在史官。交久情親、尤服其才藝。文酒徵逐、相得甚楽(余と伯辰、同じく史官に在り。交わり久しくして情親し、尤も其の才藝に服す。文酒徵逐して、相甚だ楽しきを得)」と記している。史官とは、明治政府が明治十年に設置した修史館(同八年、歴史編纂のために設置された、修史局を改組したもの)を指す。松陽は内閣権少書記官が最後の職となっているが、特に修史館在職時を取り上げたのは、あるいは松陽がその才芸を發揮するのに、修史館——士大夫にとつて、歴史編纂に関わることは、的確な記述能力などが強く問われる

ため、特に重い意味を持つ——こそが最もふさわしい、と一六が考えたためであろうか。一六の息子、巖谷小波も「寧齋主人と余とは、実に不思議の宿縁あるものである。主人の父常共氏は、又松陽と号して有名な学者であつた。されば我が父とは只に同職の同僚であつたのみならず、私交にも同好の誼を篤うして、実に莫逆の間であつたが、其児等も互ひに親友として、交際は前後二十年に垂んとす」と回想しており、一六・松陽の交際の深さを述べている。

また、松陽は明治十四年五月四日に亡くなるが、それからまもなく刊行された「新文詩」第七十三集(辛巳四月至五月)、同第七十四集(辛巳五月至六月)には左記のような松陽を追悼した詩文が収められている。

第七十三集

巖谷一六「哭野口伯辰」詩(評は依田学海)

第七十四集

蒲生襲亭「祭野口伯辰文」(評は裏園(姓名未詳))

丁野遠影「哭野口伯辰」詩(評は一六)

この時、一六は修史館一等編修官、依田学海は同三等編修官、丁野遠影は警視庁二等警視である。蒲生襲亭はかつて修史局三等協修を勤めていた。丁野と松陽との接点については不明であるが、依田・蒲生はいずれも太政官管轄の修史館(修史局)に勤めていたから、太政官の官吏であった松陽とは、詩壇以外でも交際はあったであろう。学海は『学海日録』(7)の中で、「明治十四年 日野注」五日。出仕す。きのふ野口松陽やみて歿す。松陽、名は常共、肥前諫早の人。

詩文最工なり。人となり温厚にして事務に通ず。癩疾にかかり久しく病たりしが終に不起。惜かな。六日。少雨。松陽の葬を青山に送る」と記し、松陽の死を悼んでいる。一覽を見れば解るるように、一六は自ら松陽追悼の詩を作り、丁野の詩の評者にもなっている。ここにも一六と松陽の交際の深さを伺えるのである。寧齋の詩人としての成長を考える上で、一六の存在の大きさは注視する必要がある。

『出門小草』の構成について

明治十六年、詩壇への登場を果たした寧齋は、一方、哲学館（現在の東洋大学）において学業に励んでいる。寧齋の友人であり詩人である、佐藤六石（元治元年～昭和二年）は寧齋を追憶した文章に次の一節がある。

去る五月十二日（明治三十五年 日野注）に亡くなった野口寧齋と余とは、随分古い友達で、その交際を始めたのは、明治十七八年頃であつた。その頃、寧齋は哲学館に、余は皇典講究所に入学して居たが、好きな道として課業の暇さへあれは平仄を並べ、一詩出来毎に、それを浄書して「毎日新聞」へ投寄して居た。「毎日新聞」の滄海拾珠欄は、初め森春濤先生が担任して居られたが、その後槐南先生が代はられた。寧齋も余も此の拾珠欄のお蔭で、世間に詩名が知られたのであつた。

春濤・槐南父子の編する「新文詩」「新新文詩」、詩の評者となつていた「毎日新聞」への投稿を通じ、寧齋はその詩人としての才能

を開花させている。しかし、それはあくまでも一投稿者としての立場に留まつており、詩壇における存在をはっきり示すためには、詩集を刊行することが求められた可能性が高い。しかも、先の記事を書いた佐藤六石は、『出門小草』刊行四ヶ月前の明治二十二年十一月に詩集『扁舟載鶴集』を刊行している。四歳年上の六石が詩集を刊行したことは、寧齋にとつて詩集を世に出すことへの大きな刺激になであつたことは確かであろう。六石は、先の記事で『出門小草』刊行についての経緯も述べている。

出門小草の上梓 寧齋が著にして、その上梓せる始めは、出門小草である。此は暗に余が「扁舟載鶴集」と相對峙する積りで著したので、題簽は巖谷一六翁。序文は矢土錦山氏、余の「載鶴集」と少しも替らぬ。殊に四号字で廿一字詰九行の排列まで同じであつたが、その作に至りては、精練淘汰俗に所謂絹飾にかけたもので、余が集とはまるで雲泥の相違であつた。で熊谷寺懷古の作は、余が九十九里歌の七古と対し、恭祝春濤森先生の作は、余が堀上邸篠原氏題其槐陰堂二十二韻と対し、どこまでも余と対峙して遂に余をして顔色なからしめたのであつた。表1を見ると判るように、詩の数・題跋の著者など、ほぼ両書は同じ構成となつている。六石の証言と併せて考えれば、『出門小草』の刊行について、寧齋がいかに六石への強い対抗心を表したかが、はっきりと読み取れるのである。

次に序跋などを寄せた人々との関係について述べる。巖谷一六はすでに触れたので、他の人々を見ると、岡本黄石のような老大家、

表 1

題簽	野口寧齋「出門小草」目次	題簽	佐藤六石「扁舟載鶴集」目次
「出門小神」	一六「巖谷修」	「扁舟載鶴集」	佐藤六石「扁舟載鶴集」目次
表紙裏 [呈 櫻史詞苑雜篋] 野口式字 / 田細號 / 寧齋	寧齋白書・鈴印*2	表題裏 [扁舟載鶴集]	(巖谷一六)*1
表題 [出門小草]	古梅修題(巖谷修)	表題裏 [霜々山房聚珍]	(巖谷一六)
題辭	鷹城字人(謙早家崇)	題辭	古梅居士題(巖谷一六)
叙	矢十錦山(勝之)	叙	矢十錦山(勝之)
歌詩	森大來(槐南)	題詞1	森大來(槐南)
総評1	岡本黄石(通)	題詞2	本田幸(槐竹)
総評2	巖谷古梅(修)	題詞3	野口式(寧齋)
寧齋詩1 出門放歌(以下全ての詩に槐南の評のみが付きされている)		六石詩1	己丑八月、舟登雲岸島(付、黄石・春濤、槐南批評)
寧齋詩2 車中望大宮公園、卒賦二律。似同海攝古風		六石詩2	舟中放歌(付、黄石・槐南批評)
寧齋詩3 過浦東		六石詩3	寒川(付、槐南批評)
寧齋詩4 晚至熊谷、寺山屋川米苑、延余於家、賦此抒謝		六石詩4	自千葉至東金途中(付、黄石・一六、春濤、槐南批評)
寧齋詩5 訪刈谷富春梅花村莊		六石詩5	東金客舍(付、一六批評)
寧齋詩6 漢源閣		六石詩6	槐陰堂主人篠原君、邀飲八鶴亭。臨水對山、眺曠絕佳。欲用梁星巖先生旧題韻以賦一律、未成。君促之甚急、乃占二十八字、塞責。(付、槐南批評)
寧齋詩7 歲晚書懷 節二		六石詩7	八鶴湖。用星巖先生旧題韻(四首) 付、槐南・春濤・一六批評
寧齋詩8 庚寅元旦、口占二律		六石詩8	湖上晚菊(付、黄石・一六、槐南・春濤批評)
寧齋詩9 即事		六石詩9	川場村所見(付、槐南・一六批評)
寧齋詩10 晚起		六石詩10	堀上村篠原氏宅、題其槐陰堂、二十二韻。(付、槐南・一六、春濤、黄石批評)
寧齋詩11 熊谷寺懷古		六石詩11	片貝村飯高氏食餘、賦賦。(付、黄石・一六、槐南批評)
寧齋詩12 寄懷久保湖南在鎌君		六石詩12	九十九里歌(付、一六、槐南・春濤批評)
寧齋詩13 五日、散策紀游、五百		六石詩13	二袋村婦翁佐瀨氏家、得雜句數首。(付、黄石・春濤、槐南・一六批評)
寧齋詩14 竹枝 節一		六石詩14	別内子(付、槐南批評)
寧齋詩15 人日、寄懷槐南先生		六石詩15	晚發二袋村(付、一六、槐南批評)
寧齋詩16 恭懷春濤泰先生		六石詩16	土気山中(付、黄石・春濤、槐南批評)
寧齋詩17 寄懷古崎晴湖、田沼相祖		六石詩17	南菊海上(付、槐南・黄石・一六)
寧齋詩18 將婦京、留別富春星川二子		六石詩18	還家後得一律(付、黄石・春濤、槐南批評)
跋	森大來(槐南)	評など	岡本迪(黄石) 関
題詩	石球衣坂周 岩川巖漢香 湘南大久保達 六石佐藤寛		巖谷修(一六) 題 老春森翁魯直 春濤 妄言 森大來(槐南) 安批 孫君異(東安) 乱説
奥付	明治二十三年三月廿五日印刷 明治二十三年三月廿六日出版 定価貳拾五圓 野口太郎 著述者兼発行者 東京市日本橋区久松町千九番地 島文次郎方寄留 長崎県土族 野口太郎 印刷者 東京市麹町区有楽町三丁目壹番地 東京府土族 川田幹一	奥付	明治廿二年十一月十日印刷 明治廿二年十月十五日出版 著作者兼発行人 佐藤六石 東京市麹町区飯田町四丁目一 番地 印刷人 東京市京橋区築地二丁目十七番地 河野定行

*1 題簽・表題裏は無記名であるが、佐藤六石「野口寧齋の逸事」により、補った。
*2 これらは架蔵本に書かれてあるものであるが、参考のため、録した。

寧齋の故郷、諫早の旧領主である諫早家崇、春濤門下でも矢土錦山のような先輩から、大久保湘南・佐藤六石など比較的年齢の近い人まで、多岐にわたっている。しかし、六石の『扁舟載鶴集』との大きな違いは、寧齋・六石共通の師である森春濤がいまいことである。寧齋にとつて、もつとも批評して欲しかったであろう春濤は、『出門小草』刊行前年の明治二十二年に亡くなっている。春濤との死別は深い痛みを伴うとともに、この詩集のもう一つのヤマ——一方は六石も指摘した「熊谷寺懷古」詩——である、「恭輓春濤森先生」詩を生み出す動機ともなっている。結果として、この詩は神田喜一郎が「凡て一百八十四句、九百二十字を数える一大長篇⁽¹⁰⁾」となつて結実し、詩壇から大きな注目を受けることにもなつたのである。槐南はこの詩を「其中開闔變化、得力香山実多（其の中の開闔變化、力を香山に得ること実に多し）」と評するように、おそらく詩の構成、自注を差し挟むところなどは、詩の形によって自らの生涯を表現した白居易「代書詩一百韻、寄微之」詩にならつているのである。また、長さでも白居易の「一百韻」には及ばないものの、九十二韻という大作となっている。

また、詩集の構成についてであるが、全十八タイトル、二十三首からなっている。詩集を生み出すきっかけとなつた熊谷への旅は、明治二十二年十二月三十日に東京を離れ、大宮・鴻巣を経て、熊谷に到着。翌年の一月上旬に帰京している。神田喜一郎はこの旅の理由を「前年（明治二十二年 日野注）の十一月二十一日、春濤が歿して、諸家の奠した多くの哀輓の作の中で、特に本田種竹と宮崎晴瀾（両者とも寧齋と同じく、春濤・槐南門下の詩人 日野注）が才力に任せて作つた七古の長篇が衆目を牽いた。寧齋はおそらくそれと勝を角さうとの意図から精魂を傾けて作つたのであらう、その出来上つた輓詩は、廻かに種竹・晴瀾の作を凌ぐ五古の一大長篇であつた。寧齋が熊谷に都塵を避けたのも、実はこれを完成するためであつたと推せられるのである」として、年末年始の煩わしさを避け、詩作に励むために、知人の居る熊谷に向かつた、とする。一方、別の見方をすれば、奥付の寧齋の住所が「島文次郎方寄留」とあるように、寧齋は世帯主ではなく、岩手県知事などを勤めた島惟精の養子となつた弟、島文次郎の家に母、恵以、妹、曾恵とともに身を寄せていたことになる。仮に次に示す、「出門放歌」の「抱疾に苦しむ」が事実——但し、これが父と寧齋を苦しめたハンセン氏病（無論、今日では治療法も確立し、何ら脅威ではないが、当時は偏見の対象となつていた）か否かは定かでない——ならば、病身の自分が弟に迷惑をかけられないと、文次郎を氣遣つて、寧齋のみ家を離れたとも考えることができる。

所収の詩全てを紹介することはできないため、詩集全体の序章にあたる、第一首「出門放歌」のみを紹介する。

出門放歌

疾風吹屋塵繞膝	疾風 屋に吹きて 塵 膝を繞る
倮然一身苦抱疾	倮然の一身 抱疾に苦しむ
窮年不看山	たる窮年 山を看す
万斛鄙吝除無術	万斛の鄙吝 除くに術なし

故人勸我白雲游

故人 我に勧む 白雲の游

躍然而起興乃逸

躍然として起てば 興 乃ち逸し

忙中偷閑亦忙

忙中に閑を偷むも 閑も亦た忙がし

算来今年明日畢

算来すれば 今年 明日に畢はる

是誰破膽文送鬼

是れ誰か破膽の文もて鬼に送らん

我欲披襟談捫虱

我 襟を披きて捫虱を談ぜんと欲す

是誰紫陌拜新年

是れ誰か紫陌にて新年を拜せん

我欲青山繙異帙

我 青山に異帙を繙かんと欲す

人間姑絶閑應酬

人間 姑く絶たん 閑なる応酬

望外肯求新撰述

望外 肯へて求めん 新たな撰述

抗手乱山何処辺

手を抗ぐれば 亂山 何処の辺ぞ

出門笑揭登程筆

門を出づれば 笑ひて掲げん 登程の筆

書曰己丑臘月三十日

書して曰く己丑臘月三十日

あばら屋の中で貧窮と病氣の内に年を過ごそうとし、山を見る余裕もなかった。そこに友人が俗世から離れた地への旅を勧めてくれた。旅に出ようと、いざ思い立ってみると、はやる気持ちや時間というものは、あつという間に過ぎてゆく。数えてみれば明日で今年も終わってしまう。都会で窮鬼、すなわち貧乏神の肝が潰れるような詩文を書いて、新年を迎えるのではなく、旅に出て思うままに議論をし、珍しい書物を読みたいのである。俗世での無意味で退屈な詩の応酬はお断りにし、旅先では新しい詩文を書くことに努めることにしよう。我が家に手を上げて別れを告げると、行く先の山並はどのあたりにあるのであろうか。家の門を出ると、行く先々のこと

を記す筆を笑いながら取り上げ、まず「己丑の年、十二月三十日」と書くのである。詩の要旨はこのようになるう。

書名、第一首にある「出門」という表現については、森槐南が跋文に「李青蓮云「仰天大笑出門去、我輩豈是蓬蒿人」命名之意可知矣（李青蓮云はく「天を仰ぎて大笑し 門を出でて去る、我が輩豈に是れ蓬蒿の人ならん」命名の意知るべきかな）」とし、李白「南陵別兒童入京」詩の一節を挙げる。この槐南の指摘を踏まえて、跋文に続く永坂石埭らの題詩も「出門一笑大江横」（永坂石埭）「出門一笑伴浮鷗」（巖溪裳川）と句を作っている。あるいは韓愈「出門」詩が寧斎の念頭にあつたかもしれない。

出門 韓愈

長安百万家 長安 百万の家

出門無所之 門を出でて 之く所無し

豈敢尚幽独 豈に敢へて幽独を尚ばんや

與世実参差 世と実に参差なればなり

古人雖已死 古人 已に死すと雖も

書上有其辞 書上 其の辞有り

開卷讀且想 卷を開きて読み且つ想へば

千載若相期 千載 相期するが若し

出門各有道 門を出づれば各道有れど

我道方未夷 我が道 方に未だ夷らかならず

且於此中息 且く此の中に於いて息まん

天命不我欺 天命 我を欺かず

李白の詩が長安に向かう、期待に満ちた旅の始まりであるのに対し、韓愈の詩では同じく長安に着いたものの、訪ねるべき自分を庇護してくれる人もなく、閉塞感の中、それでも「天命 我を欺かず」と気持ち奮い立たせる姿がある。李白の詩の正反対の方向を向く韓愈の詩の影響を問うのは難しいかもしれないが、「古人 已に死すと雖も、書上 其の辞有り。巻を開きて読み且つ想へば、千載 相期するが若し」には、次に取り上げる「恭輓春濤森先生」詩における春濤への追悼につながるものを見出すのである。

「恭輓春濤森先生」詩について

先にも触れたが、神田喜一郎はこの詩を評して、次のようにいう。前年の十一月二十一日、春濤が歿して、諸家の奠した多くの哀輓の作の中で、特に本田種竹と宮崎晴瀾が才力に任せて作った七古の長篇が衆目を牽いた。寧齋はおそらくそれと勝を角さうとの意図から精魂を傾けて作ったのであらう、その出来上った輓詩は、廻かに種竹・晴瀾の作を凌ぐ五古の一大長篇であった。寧齋が熊谷に都塵を避けたのも、実はこれを完成するためであつたと推せられるのである。(中略)凡て一百八十四句、九百二十字を数える一大長篇である。しかもその内容は、一篇の春濤の伝記と謂つてもよければかりではなく、明治漢詩史の重要資料でもあるので、ここに録しておきたいと思ふのであるが、何分にも長篇のこととて割愛する。

前半部分については既に指摘しているので、後半部分について考え

る。春濤が亡くなった後、春濤が漢詩欄の批評を担当した毎日新聞に、槐南の談話に基づく「森春濤先生事略」が、明治二十二年十一月二十九日から十二月四日にかけて連載されている。⁽¹⁾寧齋が「一篇の春濤の伝記」である「恭輓春濤森先生」詩を作るにあたつてもこの「森春濤先生事略」や、槐南ら春濤の近親、同門の先輩からの直話、自分自身と春濤との交わりが根本となつていよう。本論文では、現代語訳や注釈は別の機会に譲り、八句で一段落となつてるので、個々の段落の書き下し、及び要旨を示す。(一)内は寧齋の自注)

【詩序】

春濤先生、己丑十一月念一日を以て易簣す。余、垂髫より通調し、恩遇多年なり。父執との誼厚く、情は叟孳に比す。而して料らずも今日有るなり。令嗣槐南君、哀毀礼を過ぐ。余、朝昏過従し、何ぞ遽を忍び志痛まんや。庚寅一月八日を越え、卒哭の辰に当たり、余、偶ま熊谷に在り。乃ち香を焚き位を設け、恭しく長古一篇を奠し、哀しみを辞に見はず。(春濤が前年に亡くなったこと。自分が子供のころから多くの知遇を受けたこと。父、松陽もまた春濤と深い友情があつたこと。槐南が春濤の葬儀の際、哀しみの余り、舌を傷つけ、出血したこと。自分が今でも春濤を失つたことの哀しみを述べ、この五言古詩をその霊に献ずることを記す)

【第一句から第八句】

吁嗟 正声亡び、人に伝ふるも終に作らず。世を挙げて姿媚を貴び、讒譏たるは皆俗学なり。経は葩^{はな}ありて邪無く、騷は怨みて以て

寄託す。先生の出づるを待つこと有りて、集成して新格を創る。
(春濤の出現により、途絶えていた伝統に、新たな息吹を入れて復興したこと)

【第九句から第十六句】

蔚たり彼の古金城(名古屋、一名は金城なり)、世々家は扁鵲を追ふ。古壁 夜に方を伝へ、清流 晨に薬を洗ふ。漫に期す 三たび肘を折るを、刀匕 忽ち霍を揮ふ。総て俗難の医のためなり、高才 敢へて齷齪せんや(春濤が名古屋の医家に生まれ、医者となるべく研鑽を積んだこと)

【第十七句から第二十四句】

李・杜・韓・蘇・黄、一一咀嚼に供ふ。漂麦 佳話を留め、苦吟自から覚えず(先生、鷺津益齋の塾に在るとき、詩を嗜むこと食色よりも甚だし。一日、庭中に曝書するに、先生は監たり。先生 詩を思ひ、雨驟の至るを知らず。伝えて談柄と為す。益齋の嫡嗣、毅堂君戯れて贈るに曰ふ「当年の佳話 吾能く記す、高風の庭前 漂麦来る」と)。麗思 千言を動かし、墨妙 斧鑿無し。高手 鵬を射るを推すも、空山 尚ほ璞を抱く(その一方、詩人としての才能に目覚め、鷺津益齋の塾、有隣舎において、詩作に励んだこと。詩作に励むあまり、虫干しをしていた書物が雨に濡れるのにも気づかなかつたこと)

【第二十五句から第三十二句】

蟹江 秋 正に好し、大酔して昼閣に上る。甲を蘸せば海 杯と為し、銚を荷へば天 是れ幕なり。船腹 蘆花に撐し、笑ひて客星

の脚を加ふ。漁笛 呼びて夢醒め、水月 灑として捉ふべし(先生蟹江村に寓す。蘆花漁笛集を著す。句有りて云ふ「臥し伸ぶ閑脚 船腹に加へれば、人は道ふ蘆中に客星有り」と)(尾張藩の蟹江村にて、風雅の楽しみを味わつたこと)

【第三十三句から第四十句】

豪懷 担簦軽く、長路 空囊を忝せん。淪落たり 書生の衫、蹴踏たり 居士の屨。風雨 函関を度り、晴雪 蓮嶽を拝す。清には瞻る 八采の開くを、険には想ふ 万夫の卻くを(貧乏であったが、江戸へ行くことし、粗末な身なりで旅立ち、富士を見、箱根の関を越えたこと)

【第四十一句から第四十八句】

端無くも江都に至り、門冷たくして箔を施さず。敞簣 雨淋浪たり、朽几 塵傾撲たり。笑ひて言ふ窮も亦た佳なり、此の才 磨啄に資せんと。一曲 売衣の歎(先生は江戸に在り。貧甚だし。「売衣の歎」一篇を賦す。戲謔百出す)、險語 驅瘧に耐う(先生善く瘧を患ふ)。(江戸に着いたものの、貧乏暮らしが続く、それでもその状況を「困窮も自分の詩才を磨いてくれる」とし、「売衣歎」詩を作つて人々の注目を集めたこと。持病の瘧に耐えたこと)

【第四十九句から第五十六句】

長嘯して更に西に向かひ、陸機 初めて洛に入る。千里 蓴羹を重んじ、多士 羊酪を愧づ。彈琴す 梁伯鸞(梁川星巖なり)、捫風す 王景略(家里松嶠なり)。項を設けて口 絶えず、相逢ひて酬酢を事とす(江戸から京へ行き、梁川星巖や家里松嶠と宴席を重ね

ねたこと)

【第五十七句から第六十四句】

最も憶ふ 月波楼、高会 冠倒卓す。銀燭 鏗然として僵れ、劍を抜きて狂僧躍る。大喝して燈を持ち來たらしめば、哦詩 神自若たり。鋒銳 当たるべからず、筆を揮えば槩を横たふに等し(先生は京師に在り。斎藤拙堂將に郷に帰らんとす。諸名士 筵を三樹坡月様に設け、之に饒す。僧月性も亦た來会す。酒酣にして、蛮舞を起こす者有り。月性佛然として、刀を揮ひ燭を仆す。衆皆色を失ふ。先生大呼して曰く「詩成りたり」と。妓に命じて燈を点けさせ、疾書して云ふ「風雨楼頭 燭 涙催し、此の筵 今夜 是れ離盃。君に従ひ酔ひて抜く 王郎の劍、莫愁(女性の名)を驚殺し 莫哀(歌の名)を歌ふ」と。満座閑笑す)。ある宴席の場において僧月性が憤りのあまり、暴れ出したこと。その混乱の中、泰然自若として詩を作り、その詩の機知に富んだ内容により、混乱が収まったこと)

【第六十五句から第七十二句】

当時 国歩艱く、壮士 紛として交錯す。詩に嗷殺の音有りて、哀しきこと霜天の角に似たり。独り詣りて溫柔を宗とし、文章 麗しきこと丹腹のごとくなり。風雅 餘声有り、卓筆を推す所以なり。(幕末の騒動の中、人々の詩にも殺氣だつた雰囲気があつたこと。春濤の詩の持つ魅力が理解されなかつたこと)

【第七十三句から第八十句まで】

婦臥す 卅六の湾(美濃の長柄川は、世に卅六湾と称す)、腹筒更に圧救す。春水 香魚長じ、桃花 紅灼灼たり。短命なり蛍雪の

童(嫡子蛍窓君、詩才敏妙なり。神童の目有るも、病を以て夭たり)、健筆 霜空の鶚。天寒くして日暮の時、倚竹 寂寞を慰む(継配の倚竹孺人、実に槐南君の生母なり)。(美濃への帰郷。長男と二番目の妻との穏やかな生活のこと)

【第八十一句から第八十八句まで】

梅鶴 佳き眷属、同じく聴く 故城の柝。学植 淵源見れ、幸舎目豈に眩ならん。咄嗟に百春を賦せば、出づる処 都て適確なり(先生郷に在りて、執政の命を奉る。一日を限りとし、春詩百題を賦す。執政驚嘆して曰く「胸に錦繡有り」とは、古人我を誣ひず」と) 漫りに才 限り有りと言ふも、餘裕 真に綽綽たり(先生に「三日苦吟して 才 限り有り、百方冥搜して 句円なり難し」の句有り)。(名古屋への移住。尾張藩の重役から詩の課題を与えられ、見事に応えたこと)

【第八十九句から第九十六句まで】

腔に満つ 憂世の心、毫端 民の瘼より発す。小人 志を喪ふを憐れみ、士風 衰弱を救はんとす。堂堂たり 黒船行、語を出だせば殊に塞謬なり(嘉永中、米艦 浦賀に来る。海内騒擾たり。先生は「黒船行」を作り、之を紀す) 毀茶は詞も亦た微にして、織兒吐舌して作づ(賞茶の結社、尾藩最も甚だし。先生は「毀茶行」を作り、其の玩物喪志を諷す)。(時勢にも深く目を向け、社会への警告を詩によって行つたこと)

【第九十七句から第百四句まで】

忽ち聖明の治に遭ひ、雅頌 筆削を待つ。京国 故人多く、杖を

曳きて雲嶠を出づ。香草と美人と、性靈 木鐸を称す。汝南 月旦
新たに、文詩 評駁厳し（明治甲戌、先生居を東京に徙し、茉莉吟
社を創り、「新文詩」を編ず、月次の刊行なり。世 之を篋中集に
比す）。(明治を迎え、東京に赴き、詩文雜誌「新文詩」の刊行を始
めたこと)

【第百五句から第百二十二句まで】

幽奇なり 長吉の拈、瑰麗たり 義山の斷。或ひは謂ふ詩中の魔
なりと、先生 嗒然として嘆ふ。指を弾きて華嚴を現し、白毫 眉
灼爍たり。煩惱 即ち菩提にして、菩薩の縛を受けずと（先生最も
竹枝香奩等の作を喜ぶ。或ひと目して詩魔と為す。先生自嘲を賦し
て云ふ「三生の口業 一泥犁、笑ひて詠ず風懷待品の題。傍人のた
めに説くも渾（すべ）て信ぜず、大煩惱 是れ大菩提」と）。(春濤
の艶麗な詩句に対して、「人心を惑わす詩人」と揶揄されたこと。
その批判を洒脱にかわしたこと)

【第百十三句から第百二十句まで】

鸚鵡 韓郎を驚かし、鴛鴦 崔珏を笑ふ。青蓮 大いに呼ぶべし、
餘は皆才力薄し（先生 青蓮・昌谷・玉溪を奉じ、圭臬と為す。梨
堂相公、其の堂に顔して曰ふ「三季」と）。客来りて何の談ずる所
ぞ、阿戎 識字博し（先生の「辛巳新年」に「客来りて多くは阿戎
と談ず」の句有り。蓋し槐南君を指すなり）。衣鉢 箕裘を譲り、
夢寐 邱壑を憶ふ。（春濤が李白・李賀・李商隱を詩の手本とした
こと。息子の槐南が詩人としての才能を發揮し始めたこと。故郷へ
の思いを募らせること）

【第百二十一句から第百二十八句まで】

三年 一笑して留まり、越女 真に綽約たり。花は压す玉欄干、
柳は維く金絡索。八百八洲の秋 笑ひて傲る天摸を把らんと。游仙
夢縹緲、月に和して流霞を酌む（庚辰の夏、先生北游す。『新潟竹
枝』一卷有り。丁亥の秋、仙台に遊ぶ。松島を觀て、「游仙」十二
首有り。並びに人口に膾炙す）。(明治十三年、春濤の新潟への旅。
同二十年、春濤の仙台への旅)

【第百二十九句から第百三十六句まで】

濤を觀るに興 最も豪なり、丁亥正月の朔。雲霞猶ほ未だ曙なら
ざるに、金烏 声啞啞たり。輶輅たり海門の潮、扁舟 心境拓く。
雲夢 八九の呑、快を呼びて矍鑠たるを誇る（丁亥元旦、先生鳴門
にて濤を觀る。長歌一篇を賦して之を紀す。先生晩年の大作と為
す）。(明治二十年、春濤の徳島への旅)

【第百三十七句から第百四十四句まで】

保つを願ふ黃髮の期、遽かに驚く少しく微落するを。胡蝶 春魂
醒め、海棠 秋夢悪し（先生病中の絶句「七十一年 一夢非なり、
茶煙禪榻 斜暉に倚る。児曹若し三生の事を問はば、胡蝶花前 胡
蝶飛ぶ」「西風に向ひて断腸を号ぶを聞く、香露無きと雖も色華香
し。憐むべし昨夜 月明の底、一醉呼び醒ます秋海棠」俱に嘉識に
非ざるなり）。遺吟薙歌に代え、柩を城北の郭に送る。日暮れて
雨 山に滿ち、蕭颯として乾鐘を卷く（先生の新塋は、日暮里の經
王寺に在り）。(自分の詩が己の死の予兆となったこと。春濤の死、
及び葬儀)

【第四百十五句から第四百五十二句まで】

嗚呼 七十年、煙霞 裁度に供う。私史 三千篇、雲漢 昭倬に比す〔悪詩長短三千首、私史春秋七十年〕は先生の戊子元旦の句なり。其の実は、遺稿 万を以て数ふ可しと云ふ。長しく留まる天地の間、世は羨む布衣の卦。大碣 詩人と表し、榮は勝る金紫の爵（先生の墓碑、冠するに「詩人」の二字を以てす。蓋し呉梅村に倣ふなり）。(七十年の生涯で三千もの詩を作ったこと。「詩人森春濤先生墓」と墓に記したことは、勲章を得るより、遙に名誉あることとすること)

【第四百五十三句から第四百六十句まで】

生平 古道を尚び、友于 棟蓐を聯ぬ（先生と令弟精所君は、友誼極めて篤し）。落落たり豪俠の心、情誼 然諾を重んず（先生の毅堂君におけるや、託孤の誼有り。一諾して渝はらず。真に古の人なり）。故交 我が孤なるを憐れみ、曾ち許す叩門すること数なるを。和氣 愛日温かく、具に見ゆ 恩の威渥なるを。（弟や、鷺津毅堂とも情愛が濃やかであったこと）

【第四百六十一句から第四百六十八句まで】

十六 我れ詩を学び、雌黄 偏へに懇慤なり。万里 桐花を期し、一顧 伯樂に感ず（歳は壬午に在り。余年十六。詩を録して政を乞ふ。先生題して曰はく「清風 故人のごとく来たる、故人 今は見ず。松下 清風有り、清風 何ぞ稷稷なる」と。敢へて当らずと雖も、以て坐銘に充つ）。追隨す詩酒の遊、恍然として尚ほ昨の如し。望 己に荀龍を負ひ、恩 未だ楊雀に報ひず。（父、松陽を失った

自分へも優しく接してくれたこと。自分の詩に真心のあるの添削をしてくれて、優れた指導者であることを感じたこと。その恩情に未だ報いていないこと）

【第四百六十九句から第四百七十六句まで】

遺照 蔵して筐に在り、珠髻 白一握（先生 觀濤の小照恵まる）。同里 豊公を説き、面 自から猿獲に類す（先生自から小照に題して云ふ「本貫 尾張の洲、傍人 笑ひて休まず。竊かに聞く 豊太閤の、面貌 彌猴に類すと」。幾たびか聞く酔後の吟、先生尤も諱を善くす。我曰はく古神仙の、暗中摸索して著すと。（春濤自らが「豊臣秀吉と同じように、猿に似た顔である」とおどけたことを、手元にある春濤の写真を見て思い出すこと。春濤が「自分は昔の仙人がうろろうしている内にここに来たようなもの」と自らを戯れに評したこと）

【第四百七十七句から第四百八十四句まで】

仙や今安くにか在らん、我が心 転た悠逸たり。爰に卒哭の辰に当たり、寒泉 幾勺を奠ぜん。再拝して一に歎歎し、仰望す 天宇の廊。鐘歇みて 雲容容、髻髻たり 瑤台の鶴。（その仙人のような春濤はどこに行ってしまったのか、と心が落ち着かないこと。春濤の命日を迎え、熊谷の地で春濤の霊を弔うこと。春濤の霊がどこへ行ってしまったかと思うこと）

【槐南の評】

寧齋は松陽先生の嫡嗣たり。先生と先君子との交、知己の感有り。故に寧齋の此の篇、全力を用ひて之を為す。布置井然として、一糸

表2

	野口靈齋「恭輓春諱森先生」詩注（抜粋）
文政二年 生于尾張一之宮。	
天保四年 耽詩作。	
天保六年 七月日岐早蓮一之宮。九月赴壺江。	
天保八年 哭鶴津松陰先生。	
天保九年 遊海門寺、佐屋、鍋蓋。	
天保十年 還一之宮家。	
天保十一年 九月鷲津益齋先生見訪。	先生在鷲津益齋家。嗜詩甚於食色。一日曝書於庭中。先生監焉。先生思詩。不知雨驟至。伝為談柄。益齋納扇戲言君戲贈曰「当年佳話吾能記。高風庭前灑妾來」
天保十二年 有常盤、半若二國詩。又有遊鎌谷大作。	
天保十三年 有春日江村雜詩。	
弘化元年 名呂縣客舍暫留。	
弘化四年 與齋房螢窓生。	
嘉永三年 遊數調梁川星巖、遇篠崎小竹等。	先生在江戶。貧甚。賦「完衣歌」一篇。戲謔百出。
嘉永四年 四月有江上偶成詩。抵江戶、有越園嶺其他觀瀨坂、清見寺諸作。交遠山家如。婦路病于大磯客舍。	嘉永中、米糶來于浦賀。海內騷擾。先生作「黑船行」紀之。
嘉永五年 有柳町又喪兒詩。	
嘉永六年 會詩友於草堂、行蘭亭修禊。有蘭亭集字詩五律十首。	
安政元年 貧甚。有村童牧羊四詩。	
安政二年 与村瀨太乙唱和。十月藤本鉄石來訪。有篠陰村舍雜詩。	
安政三年 有文字詩。十二月十四日喪室。有悼亡詩七絕四首。	
安政四年 薈髮。有三十年日頂詩。謁鷲津先師墓。過齋藤拙堂翁。	先生在京師。高藤拙堂將掃墓。諸名士設筵于三樹坡月樓、餞之。僧月性亦來會。酒酣、有起靈舞者。月性拂然。揮刀仆燭。衆皆失色。先生大呼曰「詩成矣」命妓点燈。疾書云「風雨樓頭燭淚垂。此筵今夜是離臺。從君醉放王郎劍。驚殺莫愁歌莫哀。滿座聞笑。」
安政五年 抵京師磨針嶺作瀟湘樓詩。	嶺子靈窓君。詩才敏妙。有神童目。以病夭。
安政六年 娶村瀨氏。有星縣翁追悼詩。	繼配倚竹瀨人。實槐兩君庄母也。
萬延元年 喪兒真童。子勳弟日大阪婦。	賞茶結社。尾藩最甚。先生作「毀茶行」。諷其玩物喪志。
文久二年 二月孝兒、喪村瀨氏。有悼亡詩。	先生在郷。奉執政之命。限一日。賦書百題。執政驚嘆曰「胸有錦繡」。古人不我誣」
文久三年 九月娶國島氏。有一高山竹枝。	
文久五年 五作住居於名古屋桑名町三日。曰桑三軒。神波即山。永坂石球等入門。舉兒泰一郎（槐南）。	
元治元年 七月有聞蛤御門變詩。中秋月舞弄子勳旁靜室詩。此年鷲津堂仕尾藩為侍講。	
慶應元年 有田宮經從後島陪遊詩。開藩井竹外計等作。	
慶應二年 九月遊越前。寓福井孝顯寺。謁松平春嶽公。十二月下足羽羽、三國港滞在。	
慶應三年 遊吉崎・山代諸地。有三國竹枝五十首詩。此年余入門。當時稱永井二編。	
明治元年 從藩公北征軍。与羽羽花南等應酬。編「洞院履歷」。「新曆譜」。	
明治二年 中秋藩公賜宴。有五言排律一首。	
明治三年 三月赤井西浦（鈔之助兒）聞詩會於其家。同月十三日子槐南上学。有志喜七律一首。八月十二日城內公宴。有志會詩排律二章。	
明治四年 歲暮一首「有客中聊復爾。也勝在家貧」之句。近況可想。	

きよう。

最後に

『出門小草』は、「恭輓春濤森先生」詩のような長大な古詩の他にも、律詩・絶句の詩を収め、表現の幅のある詩集でもある。しかも、それを二十六才の若さで成したことは、冒頭の中村の指摘にあるように、詩人としての声価を定めるには充分なものであった。当然のことではあるが、これらの詩は寧齋一人の能力のみの作物ではなく、槐南や兄弟子達の助言・添削もあつたであろう。それでも、寧齋の優れた詩才がこの詩集の基盤であることは確かであり、後に槐南を支え、明治漢詩壇に欠かせぬ存在となる寧齋の力量を大きく世に知らしめるものとなつたのである。

注1 寧齋の先行研究、及び寧齋に関連する資料には、次のものがある。

- 中村忠行「正岡子規と野口寧齋」、文学33110、岩波書店 一九六五年十月。合山林太郎「野口寧齋の前半生―明治期における漢詩と小説―」、東洋文化復刊第九十五号、無窮会 二〇〇五年十月。同「野口寧齋の後半生―明治期漢詩人の詩業と交友圏―」、「斯文」第一一五号、斯文会、二〇〇六年三月。廣庭基介「研究成果 島文次郎 本館初代館長略伝」、静脩臨時増刊号100周年記念、京都大学附属図書館、一九九七年十一月。前田愛「嗚呼世は夢か幻か―野口男三郎事件類末」（一九七七年、朝日新聞社より刊行の『幻景の明治』所収。後に『前田愛著作集』第四卷、岩波現代文庫にも所収）。松本清張「ミステリーの系譜」、一九六八年、新潮社より刊行。後に中公文庫に所収。*「野口男三郎事件」の記述がある。永原和子監修『日本女性肖像大事典』、日本図書センター、一九八五年十一月。*野口曾恵子の写真を収める。手塚登望「寒空の梅

その面清く尊し菩薩にも似て」、文芸叢書、一九八九年三月。*野口曾恵が晩年を過ごした、諫早の福寿園を題材とした小説。

本論文では、特に合山「野口寧齋の前半生―明治期における漢詩と小説―」より、多大な裨益を受けた。ここに記して、謝意を表する。また、本文中での合山論文の引用は全て右論文からである。

2 『出門小草』は架蔵本を用いた。なお、第六首「漢源閣」詩は、「天孫擲下支機石、池水溶溶碧似油。夢裏仙楂尋不得、澹雲深鎖小迷蔵」とあるが、寧齋が朱で「蔵」字を書き換えて、澹雲深鎖小迷蔵とある。「蔵」字では韻字にならない。また、この「漢源閣」の命名者は春濤である。春濤「漢源閣」詩（『春濤詩鈔』卷十六所収）に「游竹井澹如別墅。墅在星川水源之地。予命之曰漢源閣。花竹幽秀、蓋不讓輞川之莊也」と注記がある。

3 神田喜一郎編『明治漢詩文集』（明治文学全集第六十二巻）、筑摩書房、一九八三年八月。

4 「新文詩」は二松学舎大学附属図書館所蔵によった。

5 国立国会図書館所蔵によった。現在では国会図書館近代デジタルライブラリーで見ることができる。

6 『我が五十年』、東亜堂、一九二〇年五月（一九八七年に久山社より復刻されている）

7 学海日録研究会編『学海日録』第四巻、岩波書店、一九九二年五月。なお、「癩疾」は今日の視点では不適當な表現であるが、原文の表記のままとした。

8 「野口寧齋の逸事」、「太陽」第十一巻第八号、博文館、一九〇五年五月（専修大学図書館所蔵を用いた）

9 注(5)に同じ。

10 「六十九 槐南の暗香・竹篔の疏影」(以下、神田の引用は全てこれによる)、「日本における中国文学Ⅱ」、「神田喜一郎全集」第七巻、同朋社出版、一九八六年二月

11 『毎日新聞(復刻版)』第九十巻、不二出版。なお、この記事は「作詩作文文友」第十七号(明治三十八年八月)に再録されている。

12 詩の本文は左記の通りである。

春壽先生、以己丑十一月念一日易質。余垂髫通讀、恩遇多年。父執誼厚、情比腹拳。而不料有今日也。令嗣槐南君、哀毀過禮。余朝昏過從、何忍遽志痛焉。越庚寅一月八日、當卒哭之辰、余偶在熊谷。乃焚香設位、恭奠長古一篇。哀見乎辭。

吁嘸正声亡、伝人終不作。舉世貴姿媚、譏謔皆俗學。經葩而無邪、駭怨以寄託。有待先生出、集成創新格。清流蔚金城、名古屋、一名金城。世家追扁鵲、古壁夜方方。清風晨洗髮、漫期三折肱。刀匕忽揮奪、總為俗難醫。高才敢醜醜。李杜韓蘇黃、一一併咀嚼。漂麥留佳話、苦吟不自覺。先生在鷺津益齋塾、嗜詩甚於食色。一日曝書於庭中、先生思詩、不知雨驟至。伝為談柄。益齋嫡嗣毅堂君戲贈曰「當年佳話吾能記、高風庭前漂麥來」。麗思動千言、墨妙無斧鑿。高手推射鵰。空山尚抱璞。蟹江秋正好、大醉上巖閣。蘸甲海為杯、荷鍾天是幕。船腹撐蘆花、笑加客星脚。漁笛呼夢醒、水月灑可捉。先生寓蟹江村。著蘆花漁笛集。有句云「臥伸兩脚加船腹、人道蘆中有客星」。豪懷輕担簦、長路奈空囊。淪落書生衫、跣跡居士屨。風雨度函閩、晴雪拌連嶽。清曙八朶開、險想万夫卻。無端至江都、門冷不施箔。敵賚雨淋漓、朽几塵傾撲。笑言窮亦佳、此才資磨啄。一曲壳衣欺。先生在江戶。貧甚。賦「壳衣欺」一篇。戲謔百出。險語耐驅瘴、先生善患病。長嘯更向西。陸機初入洛。千里重葦蕘、多土愧羊酪。彈琴梁伯鸞。梁川星巖。捫虱王景略。家里松嶼。設項口不絕、相逢事酬酢。最憶月波樓、高会冠倒卓。銀燭鏗然僵、拔劍狂僧躍。大喝持燈來、哦詩神自若。鋒銳不可當、揮筆等橫槩。先生在京都。齋藤拙堂將掃鄉。諸名士設筵於三樹坡月樓。餞之。僧月性亦來會。酒酣、有起盜舞者。月性佛然、揮刀仆燭。衆皆失色。先生大呼曰「詩成矣」命妓点燈、疾書云「風雨樓頭燭淚催、此筵今夜是離筵。從君醉拔王郎劍、驚殺莫愁歌莫哀」滿座開笑。當時固步艱、壯士紛交錯。詩有嘯殺音、哀似霜天角。独詣宗溫柔、文章麗丹雘。風雅有餘声、所以推卓犖。掃臥卅六灣。美濃長柄川。世称卅六灣、腹筒更丘赦。春水長香魚、桃花紅灼灼。短命蜜雪童。嬌子蜜窠君、詩才敏妙。有神童目、以病天。健筆霜空鷲。天寒日暮時、倚竹慰寂寞。繼配

倚竹孺人、實槐南君生母也。梅鶴佳眷屬、同隨故城析。學植見淵源、幸舍目豈眊。咄嗟賦百春、出處都適確。先生在鄉、奉執政之命。限一日、賦春詩百題。執政驚嘆曰「胸有錦繡、古人不我誣」。漫言才有限、餘裕真神紳。先生有「三日苦吟才有限、百方冥搜句難圓」句。滿腔憂世心、毫端發民瘼。小人憐喪志、士風救衰弱。堂堂黑船行、出語殊蹇謬。嘉水亦中、米糶來于浦賀。海內騷擾。先生作「黑船行」紀之。毀茶詞亦微、織兒吐舌作「貧茶結社、尾藩最佳」。先生作「毀茶行」、諷其玩物喪志。忽遭聖明治、雅頌待筆削。京國多故人、曳杖出雲嶼。香草與美人、性靈稱木鐸。汝南月旦新、文詩嚴評駁。明治甲戌、先生徙居于東京、創茉莉吟社、編「新文詩」、月次刊行。世比之於篋中集。幽奇長吉拈、瑰麗義山斷。或謂詩中魔、先生嗒然嘆。彈指現華嚴、白毫眉灼爍。煩惱即菩提、不受菩薩縛。先生最喜竹枝香奩等作。或曰為詩魔。煩惱賦自嘲云「三生口業一泥犁、笑詠風懷待品題。說與傍人渾不信、大煩惱是大菩提」。鸚鵡驚韓郎、鴛鴦笑崔珏。青蓮可大呼、餘皆才力薄。先生奉青蓮、昌谷·玉溪、為主臬。梨堂相公、顏其堂曰「三李」。客來何所談、阿戎識字博。先生辛巳新年有「客來多與阿戎談」句。蓋指槐南君也。衣鉢讓箕裘、夢寐憶邱壑。三年一笑留。越女真綽約。花庄玉欄干、柳綠金絡索。八百八洲秋、笑做把天摸。游仙夢纏綿、和月流霞酌。庚辰之夏、先生北游。有「新渴竹枝」一卷。丁亥之秋。游仙台。觀松島、有「游仙」十二首。並贈炙人口。親壽與最豪、丁亥正月朔。雲霞猶未曙、金烏聲嘒嘒。韞轂海門潮、扁舟心境拓。雲夢八九吞、呼快誇嬰鑠。丁亥元旦、先生鳴門觀濤。賦長歌一篇紀之。為先生晚年大病中絕句「七十二年一夢非、微落。胡蝶春魂醒、海棠秋夢生。先生病中絕句「七十二年一夢非、茶煙禪榻倚斜暉。兒曹若問三生事、胡蝶花前胡蝶飛」聞向西風号斷腸、雖無香露色華香。可憐昨夜月明底、一醉呼醒秋海棠」俱非嘉識也。遺吟代雅歌、送檣城北郭。日暮雨滿山、蕭蕭卷乾韞。先生新筇、在日暮里經王寺。嗚呼！七十年、煙霞供幾度。私私三千篇、雲漢比昭倬。惡詩長短三千首、私私春秋七十年。先生戊子元旦且句也。其美、遺稿可以万數云。長留天地間、世羨布衣扑。大碣表詩

一人、榮勝金紫爵（先生墓標、冠以「詩人」二字。蓋倣吳梅村也）。生平尚古道、友于聯棣萼（先生與令弟精所君、友誼極篤）。落落豪俠心、情誼重然諾（先生於毅堂君、有託孤之誼。一諾不渝。真古之人也）。故交憐我孤、曾許叩門數。和氣愛日溫、具見恩威渥。十六我學詩、雖黃偏懇懇。万里期桐花、一顧感伯樂（歲在壬午。余年十六。錄詩乞政。先生題曰「清風來故人、故人今不見。松下有清風、清風何稷稷」。雖不敢當、以充坐鈔）。追隨詩酒游、恍然尚如昨。望已負荷龍、恩未報楊雀。遺照藏在篋、珠髻白一握（先生見惠觀濤小照。同里說豐公、面自類猿猴（先生自題小照云「本貫尾張洲、傍人笑不休。竊聞豐太閤、面貌類獼猴」。幾聞醉後吟、先生尤善謔。我曰古神仙、暗中摸索著。仙乎今安在、我心軫悠邈。爰當卒哭辰、寒泉奠幾勺。再拜一獻歎、仰望天宇廓。鐘歇雲谷谷、髣髴瑤台鶴。

寧齋為松陽先生嫡嗣。先生與先君子交、有知己之感焉。故寧齋此篇、用全力為之。布置井然、一糸不紊。近代作手、惟広瀬梅墩可得髣髴。先君子九原見之。必當喜故人有子矣。焦仲卿妻詩、凡一千七百四十五字。古今長篇、斯為其冠。清初吳梅村哭志衍一篇、亦稱大作。餘所罕見、而此篇相拮抗。其中開闔變化、得力香山美多。固不以冗長為能也。東洋文化三、東洋文化振興會、一九五七年十月

（ひの・としひこ 大学院博士後期課程在学）